

◆街づくりキャンペーン◆水と緑と文化の街をめざして

新春特別企画

文化観光都市“富山の創造が集客力を生む！”

昨年、立山・黒部アルペンルートを訪れた観光客は約133万2000人。黒部峡谷は、約12万8000人である。

従来、これらの観光客には全く素通りされてきた富山市であったが、少しずつ変化が見え始めた。松川遊覧船をコースに組み込もうという動きがでてきたのである。文化観光都市を目指す富山。今後の課題を“水郷柳川”と比較しながら分析する。



▶年間100万人もの観光客が訪れる文化観光都市・柳川

文化観光都市には何が必要か

富山市がまとめた平成5年度
の市民意識調査では、今後3年
間に力を入れるべき施策として
次の3点が上位にランクされて
いる。

- ①雪に強いまちづくりの推進
(36・0%)
- ②下水道の整備
(23・9%)
- ③観光資源開発・観光客誘致
自然環境保護・公園緑地
(ともに22・0%)

ここで注目したいのが3位に
挙げられた項目である。

本誌でも、6年前に独自のア
ンケートを行い、「県外からの
友達に見せる場所がない」とい
う市民の切実な声を聞いた。市
内中心部の魅力のなさを嘆く声
である。

以来、本誌では魅力ある富山
市、観光客に誇れる富山市のあ
り方を目指し、“街づくりキャ
ンペーン”を行ってきた。

このキャンペーンの中から生
まれたのが、「松川遊覧船」
〔昭和63年4月〕、「松川茶屋
（平成4年4月）、「滝廉太郎記
念館」〔平成5年9月〕である。
さらに行政機関側の事業として
は、城址公園内の「親水のに
わ」〔平成元年〕、往時を偲ばせ
るシンボリックなデザインの
「舟橋」〔平成2年〕、展望塔の

ある「市庁舎」〔平成4年〕な
どが次々に完成した。

点から線へ、そして線から面
へと富山市中心部の観光の魅力
は、確実に広がりつつあるのだ。
そして、本誌キャンペーンにて
何度も討議されている「富山城
址公園」の整備問題は、今後ま
すます大きな課題となってくる
だろう。

さて、誰もが訪れたくなる街
富山を創造するためには、どの
ような姿が望ましいのだろうか。
ハード面、ソフト面など様々な
要素は必要だが、最も大切な
のは、“文化観光都市・富山”の創
造であろう。

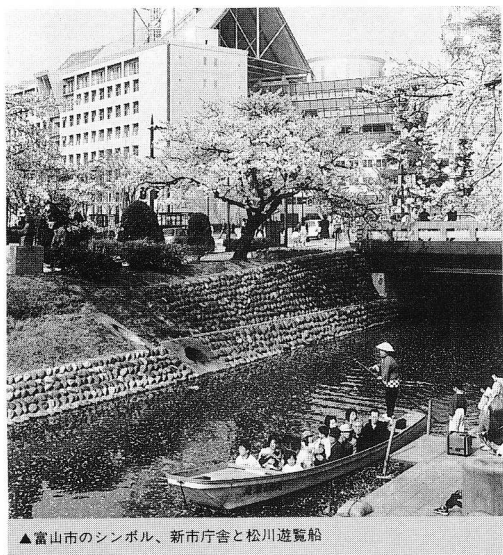
この“文化観光都市”に必要な

な条件とは何か。今まで行った
座談会などの意見をまとめると、
主要ポイントとして次の3点が
挙げられる。

- 自然の潤いを守り、活用する
- 独自の文化と観光の一体化
- 歴史的背景を生かす

そして、これらを街の中心部
に創出することによって、より
シンボリックな存在として、“文
化観光都市”を印象づけること
ができるのだ。

富山と同じく、市内中心部を
笹舟が行き交う福岡県柳川市は、
年間100万人もの観光客が訪れる
大観光地。“文化観光都市”の
イメージをいち早く創りあげた
街である。今回は、柳川市の魅
力を検討しながら、富山市の実
態に迫る。



▲富山市のシンボル、新市庁舎と松川遊覧船

検証
1

川下りの魅力

柳川

しだれ柳の緑が水面に映え、

赤レンガの並倉や白いナマコ壁がゆるやかに影をおとす柳川堀割。岸辺にはウォーターヒヤンソンや様々な水草が咲き乱れ、優雅な風情を醸し出している。

柳川で川下りが始まったのは昭和35年。現在に至るまで、水路の荒廃などの紆余曲折はあつ

たが、水の豊かな「水郷」としてすっかりイメージを定着させたといえよう。

乗船場は、西鉄柳川駅から歩いて4、5分のところに4ヵ所と、車で5〜10分の場所に2ヵ所。合計100隻余りのドンコ舟が用意され、乗船者が10名になり次第発船している。

棹をさすのは、絵笠にハッピ姿の船頭さん。柳川なまりのガ



▲堀割を使って行われる様々なイベントも、魅力のひとつだ。



兼路銘菓

とよつ



本舗 大野 竜

高岡・富山・金沢

イドが旅情を誘う。

柳川川下りの特色は、次々と変化する自然と歴史の美しいパノラマであろう。まず右手に見えてくるのが「鋤崎土居」と言われる、柳川城郭外堀の堤防跡。次に城内に水を入れる唯一の水門であった「柳川城塞水門」へと進んで行く。

そして、大正初期に建てられたレンガ造りの「並倉」が左手に姿を現す。西日をあびて水面に映る赤レンガと水の青とのコントラストは非常に美しく、代表的な景観の一つでもある。

「武家屋敷」を通り抜けると、正面に見えるのが旧柳川藩主立花邸の「御花」。この屋敷を一周すると、ナマコ壁で有名な「殿の倉」があり、土蔵の白壁が緑に映える。

これらの見どころは、舟を降りた後、もう一度歩いて散策することができるが、「水郷柳川」の景観に果たす役割は大きい。

富山

川の両岸に続く桜並木が、四季折々の風情を漂わせる松川。市内中心部への観光客誘致を図るため、笹舟による遊覧船が運行を開始したのは、昭和63年4月のことである。

春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、そして冬は雪……。自然の宝庫である富山らしい景観が魅力であり、特に満開の桜のトンネルは見事である。

しかし、柳川に比べると、舟上からの眺めた変化が乏しいことも事実だ。「舟に乗ったら何が見えるんですか？」という観光客や市民の声も多い。

「親水のにわ」や「舟橋」、「七十二峰橋」の完成など、川からの視点を大切にした事業も行われてきたが、今後さらに魅力ある景観づくりを進めていくことが大切であろう。

本誌ではその一環として、「松川べりの護岸に潤いを取り戻そう!」との提案を行っているが、四季折々の草花が咲き誇る美しい護岸の創出は、自然の宝庫である富山を印象づける有効な手段でもある。

松川を生かした「水の都・富山」創造への挑戦は、今年で6年目。一つ一つ魅力を創りあげていくことが重要である。

証2

文化との密接な連動性

柳川

近代日本の大詩人・北原白秋（1885〜1942）は、柳川藩御用達の家産問屋に生まれた。父の時代には酒造りが主となり、大変な繁盛ぶりであったが、彼が16歳の時に大火で類焼。一家は大打撃をこうむり、傷心の白秋は詩作に励むようになっていった。

「からたちの花」、「ベチカ」、「待ちぼうけ」など、今も歌い継がれる名作を世に残した白秋。彼は生涯柳川を愛し、「水郷柳川こそは我が詩歌の母体である」と述べている。

柳川市では、昭和44年、消失



北原白秋



滝廉太郎

した生家の母屋を復元し、「白秋記念館」（川下りの最終地点にある）として公開する他、毎年「白秋生誕祭」（1月25日）、「白秋祭」（11月1日〜3日）を行っている。中でも、百隻以上のドンコ舟を連ねて水上パレードが行われる「白秋祭前夜祭」は壮観。「水郷柳川」らしい見事な文化との調和である。

富山

楽聖・滝廉太郎（1879〜1903）が多感な少年時代を過ごした富山。折しも、彼が通っていたのは明治時代、富山城址内にあった神通川辺り（現在の松川）の小学校だった。

本誌では、平成元年に「荒城の月のモデルは富山城」との新説を発表。滝廉太郎と富山との関わりを強調し、文化都市・富山のイメージアップづくりに取り組んでいる。

また、平成4年から「滝廉太郎祭」を開催、平成5年には松川遊覧船の見どころとして「滝廉太郎記念館」もオープンした。文化との緊密な一体化を目指し、我々の試みはまだ始まったばかりである。

検証 3

川の歴史を生かす



ゆったりと川下りをする時、その歴史が蘇ってくる。

だことはあまりにも有名。その頃神通川は川幅も広く約300m。64艘の笹舟をつないだ舟橋が、明治15年まで230年間にわたって架けられ、安藤広重の絵にも描かれる名所の一つであった。(現在も松川には、往時を偲ばせるシンボリックな舟橋が架けられ、常夜燈が残る)

また、神通川には江戸初期から明治後期にかけての最大の通商路で、帆船や笹舟が往来し、大変な賑わいであった。

戦国時代には、富山城の外堀としての役目も果たした神通川。歴史はもちろんのこと、富山の歴史も見えてくる。

富山

錦鯉が群遊し、桜並木が川面に映える松川べり。しかし、明治36年に改修工事が行われるまで、この一帯は神通川が滔滔と流れていたのである。

当時の神通川、常願寺川は、何度も大洪水を引き起こし、住民に被害を与えた「暴れ川」。オランダ人の技師ドレーケが「これは川ではなく滝だ!」と叫ぶ

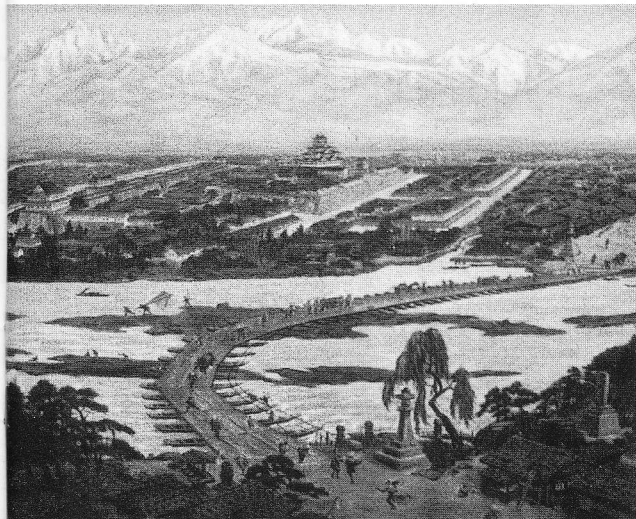
平成元年5月、柳川市で行われた『第5回水郷水都全国会議』で、小宮徹柳川市長は次のように述べた。

「この柳川は、水郷柳川として全国に知れ渡っておりですが、皆さんの考えていらっしゃるような水の豊かな町ではなく、非常に水の少ない町でございます。そういう訳で、先人たちがどうして水を確保するか、活用するか、本当に永い間、水と闘い、水に感謝し、そして水を守ることに専念した土地柄でございます」

もとは有明海の一部であった柳川は、筑後川の後背湿地として陸地化部分に発達した町。低地に住み始めた人々が開発に乗り出し、様々な機能を持つ堀割を作りあげたのである。

住民たちの努力によって誕生した堀割は、農業用水、生活用水として活用された他、城の防備にも重要な役割を果たした。又、水路として物資の輸送にも使われ、たぐさんのドンコ舟が往来していた。

堀割とともに歩んだ柳川。



▲64艘の笹舟をつないだ舟橋と富山城（「富山城下の図」富山市郷土博物館蔵）

独自性のある文化観光都市をめざして

“白秋のふるさと・水郷柳川”として全国に知られ、多くの観光客が訪れる柳川市は、独自の自然・歴史・文化をみごとに生かした文化観光都市である。しかし、現在に至るまで、多くの困難を行政と市民が一体となって乗り越えてきたことを忘れてはならない。

昭和40年代、使い捨ての風潮が広まり、ゴミや家庭排水などによって水路が危機的な状態に陥ったのである。ヘドロ、悪臭

蚊の発生……。川下りの船も通行不可能になるほどの有様であったという。

水路荒廃に頭を痛めた柳川市は、当時下水道事業担当の係長であった広松伝氏をリーダーに、住民を説得し、共に浄化活動を進めた。(この水路再生への取り組みは、映画「柳川堀割物語」で紹介され、反響を呼んだ)

現在、柳川では年に1回、水門を占めて、市民総出でヘドロを除去するという大作業が行われている。住民の堀割を愛する

気持ちがあり、水郷柳川”をより魅力的な観光地としているのであろう。

広松伝氏は、「まちも私たちの生活も、豊かな水環境があったこそ精気がみなぎる」と語り、水環境の保全と地域の活性化に取り組んでいる。文化観光都市・柳川は、このような地道な活動によって支えられているのだ。遊覧船が運行を開始したことによって、松川に対する市民の意識も変わりつつある。「最近、松川がキレイになったね」という声もよく聞かれるようになった。美しい松川の姿は、文化観光都市を目指す富山のまさに“顔”である。行政と市民が一体となって松川を保全することは、観光地としての魅力を高めるだけではなく、住民にも活力を与えるに違いない。

そして、今後は次のような事柄が課題となってくるであろう。

- 歴史的背景や自然を生かし、松川ベリりの景観に多様性を持たせる。
- 滝廉太郎が過ごした街、「荒城の月」のふるさととしてのイメージアップをはかる。

- 城址公園を、緑の街・富山のシンボルとして本格的に整備する。

我々が生き続ける限り文化都市・富山の創造に完成はないからだ。

写真・資料提供/柳川市観光協会
参考文献/「柳川堀割から水を考える」
広松伝編・藤原書店



▲平成5年から「滝廉太郎記念館めぐり」も新設された松川遊覧船。